大阪船員保険病院だより

Vol.55 平成23年９月

目　次

◆ 診療科紹介（形成外科）
◆ 知っておきたい放射線被ばく
◆ 研修医日記

診療科紹介【形成外科】

形成外科とは、体全体の表面を扱う外科であり、骨や筋肉を扱ういわゆる整形外科とは、別です。形成外科は大きく分けると、Ⅰ.外傷、Ⅱ.先天異常、Ⅲ.皮膚腫瘍、Ⅳ.瘢痕・瘢痕拘縮・ケロイド、Ⅴ.難治性潰瘍、Ⅵ.炎症・変性疾患、Ⅶ.美容、Ⅷ.その他、Extra.レーザー治療に大別されますが、当科では特に下記に力を入れています。

＊皮膚レーザー治療

当院形成外科には、現在５種類の皮膚疾患治療用レーザーがあります。先天性単純性血管腫、苺状血管腫（いわゆる赤いあざです）に対して色素ダイレーザー治療を行っています。また加齢とともに出現する老人性血管腫、毛細血管拡張症も治療可能です。（保険治療適応）

その他扁平母斑（いわゆる茶色のあざ）、太田母斑（いわゆる青色のあざ）、異所性蒙古斑に対しQ-switchルビーレーザー、Q-switchアレキサンドライトレーザー治療を行っています（保険治療適応）。あざの専門外来は、月、水曜日午前中です。

その他日焼けによるシミ、黒子、イボ、刺青等についても炭酸ガスレーザー治療していますので、お気軽に相談下さい。（一部保険治療対象外となる場合もあります。）

＊下肢静脈瘤血管内レーザー治療

これは妊娠や加齢とともに出現する下肢に静脈が浮き出た状態で、女性や立ち仕事の方に多くみられます。長期間に放置すると痒みがでたり、潰瘍を形成したりすることにもつながりますので、早めの受診をお勧めします。2011年１月に下肢静脈瘤に対する血管内レーザー治療が保険収載されました。従来のストリッピング手術と異なり、切開創を残す事なく、下肢静脈瘤の治療が可能となりました。当院では、８月より血管内レーザー装置を導入し、関西でもいち早く血管内レーザーによる下肢静脈瘤の治療を行っています。専門外来は、木曜日午後となっています。

＊眼瞼下垂

年をとるにつれて、目が疲れる、物が何となく見えにくい、さらに瞳孔を塞ぐようになると、顎をあげないと物がよく見えない、そのため肩が凝るといった症状が出てきます。これは、瞼を上げる筋膜が加齢と共に緩むために起きる眼瞼下垂という状態です。程度の差はあるにしろ、加齢とともに必ず出てきます。年だからしかたがないとあきらめる前に是非ご相談下さい。手術によって、視界が広がるだけでなく、若返った印象になります。当科ではマイクロサージャリーの手技を用いて顕微鏡下に手術を行い、術後の腫れを最小限に押さえる努力をしています。

＊創傷センター、フットケアセンター開設

傷は、年齢、部位、体質によって治り方はさまざまです。小さな外傷や熱傷から褥瘡といった慢性潰瘍、糖尿病性足潰瘍、閉塞性動脈硬化症による足潰瘍をできるだけきれいに早く直すために傷を治す専門外来として、形成外科に相談して頂くために開設いたしました。特に足の潰瘍は傷を治すだけでなく変形した足に対する足型作成などの後療法にも力をいれています。

専門外来は金曜日午前中です。

＊美容について：当科では、いわゆる美容手術を行うことは少ないですが、美容外科は形成外科の一分野です。美容外科についての相談にも応じますので、気軽に受診下さい。

＊大学との連携：当科は大阪大学医学部形成外科の関連施設です。火曜日には松田健医師の診察があり（要予約）、顔面神経麻痺などの高度な手術を応援執刀していただいており、最新の医療を提供しています。

形成外科外来診療担当表

平成23年７月現在

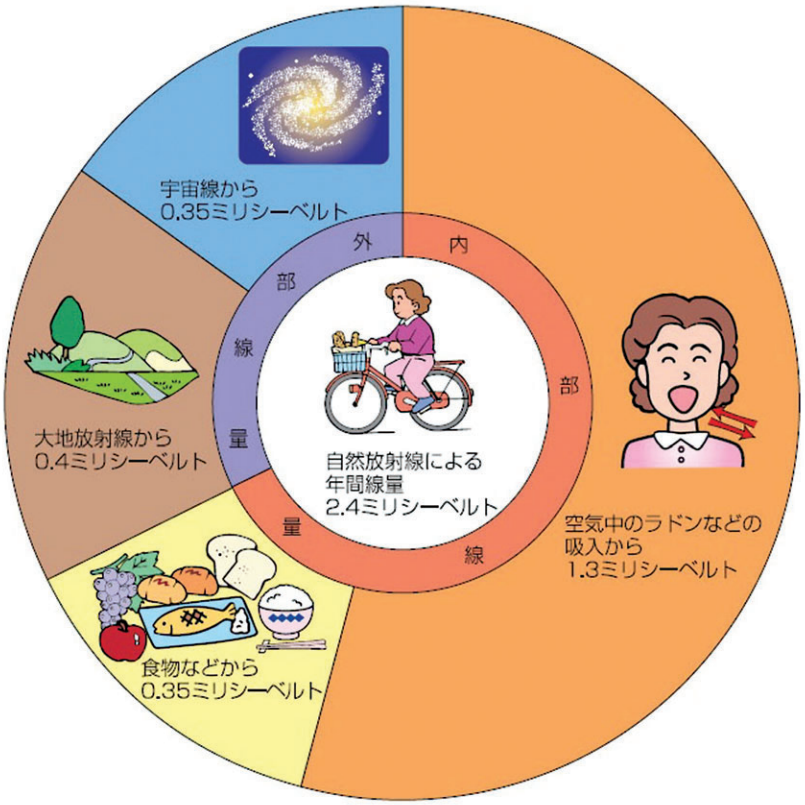
		月	火	水	木	金
午前	１診	日笠:あざ･血管腫 ･レーザー新患のみ	日笠:（予約）	日笠:あざ･血管腫 レーザー外来	本多:一般外来	当番医:一般外来
	２診	南:一般外来	石瀬:一般外来	門脇:一般外来		門脇:創傷治癒 ･フットケア外来
午後	１診		松田:（予約）　一般外来 ･顔面神経麻痺		戸田:（予約）　下肢静脈 瘤･美容相談外来	
	２診		岡本:下肢静脈瘤外来 （偶数週のみ）			

～知っておきたい放射線被ばく～　放射線室技師長　岡 崎　忠 司

東日本大震災の被災者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。被災より６か月になろうとしていますが、依然、放射線被ばくのニュースが後を絶ちません。今回は放射線被ばくについて説明いたします。

放射線とは電離を与える光や粒子のことです。多くの放射線は、ものを通り抜ける能力を持っています。放射線を出す能力を放射能、それを持つ物質を放射性物質と呼びます。今回の原発事故では原発から放射能物質が飛散している状態です。放射能物質をとりこんで体内から被ばくすることを内部被ばくと言い、体外から被ばくすることを体外被ばくと言います。

放射線の人体への影響は、内部被ばくも外部被ばくも同等と考えられます。ただ、いったん放射線物質を体内に取り込んでしまうと、被ばくから逃げられないので、内部被ばくの方がより深刻といえます。しかし、放射能物質を体内に取り込んでも、体外に排出されたり、自然に放射能が弱まったりすることで、放射能の影響も弱まっていきます。



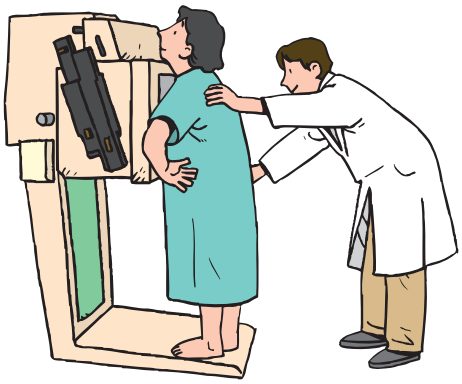
自然放射線の内訳（全世界平均、1988年国連科学委員会報告）

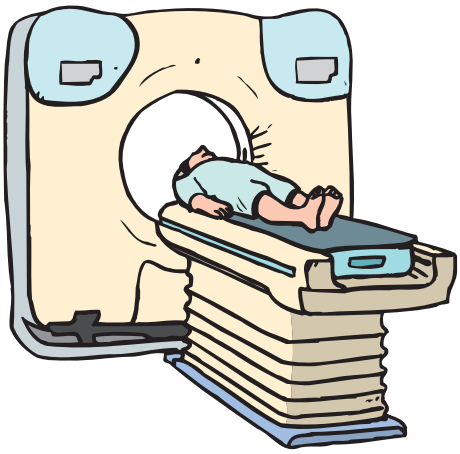
我々はふつうに生きて生活しているだけで私たちはみんな≪被ばくしている≫のです。

世界平均で１年間に2.4mSv「ミリシーベルト」という量の放射線をあびています（大気、大地、宇宙、食品等から受ける放射線被ばくを自然被ばくと言います）。

では、放射線は人にどんな影響を与えるのでしょう。放射線は人体の細胞に傷をつけたり、死滅させる性質があります。放射線の人体に及ぼす影響は多くは有害であるといえます。放射線が人体を透過するときに、そのエネルギーの一部は必ず体内に吸収されます。その吸収されたエネルギーが細胞内の染色体に切断や突然変異など異常を与えます。これが放射線障害の根源です、これは自然放射線の被ばくでも同じことがいえます。人体の放射線障害で最も重要なのはがんと遺伝です。

放射線を被ばくすると人体のあらゆる組織・器官にがんが誘発される可能性があります。特に重要なのは、骨髄の被ばくによる白血病の誘発です。一方、遺伝子障害は生殖腺の被ばくによる性細胞の遺伝子損傷が原因となります。これら放射線によって生じたがん（例えば白血病）や遺伝子障害は、放射線だけにある特有な症状ではなく、被ばくしなくとも起こりうる疾病と同じですから、それらが放射線による原因であるとは区別が難しいのです。一方、細胞が放射線による損傷を受けても、それがすべてがんや遺伝子障害につながるとは限りません。人間（生物すべて）には、損傷した細胞が修復したり再生する能力があり、放射線に被ばくした場合も例外ではありません。　放射線被ばくによる身体的影響（脱毛・皮膚の火傷など）は、その後、回復するのは細胞の修復のほか新細胞への再生がおこなわれるためなのです。これらは、被ばくした放射線量が多くなるにつれてその障害の程度も大きくなります。では、病院でのＸ線検査の被ばく（医療被ばく）はどうかというと、日本国民一人当たりの医療被ばくは１年間の平均で約２～３mSvです。これは、自然被ばくに匹敵する量で、世界平均に比べてもダントツに多いことが知られています。でも、日本は世界一の長寿国です。もちろん、被ばくによって日本人が長生きしていると言っているのではありません。でもＸ線検査、ＣＴ検査など被ばくする医療行為は日本人の長寿に貢献しているのです。Ｘ線検査、ＣＴ検査によって、早期にがんが見つかったり、良い治療方針が見つかったりすることがあり、被ばくをして生涯の発がんの確率がほんのわずかに上がることを心配するより、あなたの生活にプラスの貢献をするでしょう。他方、今回の原発事故による放射能漏れでの放射線被ばくは全く利益をもたらしてはいません。したがって医療被ばくと今回の原発事故による被ばくは、本来は比べてはいけないものです。Ｘ線検査、ＣＴ検査よりも多いから少ないから、ということはあまり考えないでください。無駄な被ばくを抑えるように診療放射線技師は心掛けています。





研修医日記

はじめまして。今年度より大阪船員保険病院で研修させていただいています、横井慶です。海遊館や大きな観覧車が病院から眺められ、周りが海に囲まれているこの病院にやってきて早５ヶ月が経ちました。始めは不安だらけでしたが、ようやくこの仕事にも慣れてきています。この間、４月と５月は腎臓内科を、６月と７月は消化器内科での研修があり、現在私は循環器内科をローテート中です。この半年間はそれぞれの科で様々な経験や知識、技術の習得をさせていただきました。

はじめの腎臓内科は脱水の患者さんから、人工透析をされている患者さんの治療まで様々と、その次の消化器内科では腹痛の急性期治療から、癌患者さんのターミナルケアまで、そして現在、循環器内科では心エコーの権威でおられる別府慎太郎院長のもとで、毎週心臓カテーテルの検査と治療があり、activeに仕事に取り組んでおられる検査技師の方や、山元先生、指導医の国重先生に囲まれて刺激的な毎日が続いております。

こうしてみると多くのことを経験させていただいた為にあっという間に半年が過ぎ去っていった感があります。毎日が忙しく、そして物覚えの悪い自分はなかなか仕事にも慣れず多くのスタッフに迷惑をかけてばかりで、いつもあたふたしておりますが、患者さんと向き合った時間がたくさんとれたときは充実感でいっぱいになります。熱心に指導してくださる先生にも恵まれ、医学の知識も溢れるほど教えていただけるのですが、それと同時に一人の患者さんと向き合った時間が多いほどその方から多くのことを学ぶことができると実感することが何度もありました。

医者の仕事になれるには、もう少し時間がかかりそうですが、まだまだ自分は半人前、四分の一人前の医者であり、学ぶ事は無限にあります。内科の研修もあとわずかで、10月からは麻酔科、外科をローテートする予定になっておりますが、きっとこの内科での６ヶ月のいろいろな経験が、後の自分の医者人生の血となり肉となるんだとおっしゃってくださる先生方の言葉を信じて、残りの内科研修に全力で取り組んでいきたいと思います。

研修医　横井　慶

発　行

大阪船員保険病院／地域医療連絡室
〒552-0021 大阪市港区築港1-8-30
TEL 06-6572-5721(代表)　FAX 06-6572-6713
http://www.sempos.or.jp/ohsaka/renkei/renkei_tayori.html

Japan Council for Quality Health Care
日本医療機能評価機構